



# SIMOT Research Center NEWSLETTER

No.4 2006.1



東京工業大学 インスティテューショナル技術経営学リサーチセンターニューズレター

## 目次

		ページ
● イベント報告	新時代の質マネジメントシステムモデル	2
● 海外活動報告	2005 環太平洋国際化学会議	
	国際化学経営シンポジウム	2
● 学生の目	国家の SIMOT の重要性	2
● コラム	「新しい制度派経済学」	3
● ショートエッセイ	Co-Evolution 事始	3
● 最近の動き	海外出張・研究者招聘	4
● イベント予定	第2回年次国際シンポジウム	4
	研究・技術計画学会 国際問題分科会	
● 連絡先		4

東京工業大学では、21世紀COEプログラム「インスティテューショナル技術経営学 (SIMOT)」遂行の中核センターとして、「インスティテューショナル技術経営学研究センター (SIMOT リサーチセンター)」を設置いたしました。  
同センターの研究内容・活動を、広く内外に知っていただくことを目的に、毎月 SIMOT リサーチセンターニューズレターを刊行しております。

## ■ イベント報告 ■

### 新時代の質マネジメントシステムモデル (2005年 12月 12日(月) 東京工業大学 百年記念館)



研究・技術計画学会 国際問題分科会では、毎月様々な国・分野の研究者をゲストとして招聘し、それぞれの専門的知識・観点から、インスティテューショナル技術経営学への示唆をいただいています。

12月例会では、東京大学 化学システム工学専攻教授の飯塚悦功氏に、「新時代の質マネジメントシステムモデル - 持続可能な成長」とのテーマで講演していただきました。日本発の質マネジメントシステム指針の成り立ち、

競争優位のための質マネジメントシステム (QMS) に関する講義を受け、企業の持続可能な成長実現に向け、競争優位の維持に必要な能力の全体像を把握し、それを通じた適切な事業戦略の適用を可能とする組織のあり方について議論しました。



## ■ 海外活動報告 ■

### 2005 環太平洋国際化学会議 国際化学経営シンポジウム (2005年 12月 17日~20日 ハワイ ホルル)

環太平洋化学会議は5年ごとに開催される化学分野の大学会で、今回も12,000人が出席し、大盛況でした。その一環として、日本化学会・米国化学会及び韓国化学会が共催して、「国際化学経営シンポジウム」が開催され、センター長の渡辺千仍教授が、SIMOT についての招待講演を行いました。講演では、SIMOT のねらいから始まり、日本企業の1980年代までの成功、90年代の苦難、そして、最近の復調の兆しを、イノベーションとインスティテューションの共進化ダイナミズムというSIMOTの機軸が紹介されました。おりしも英国エコノミスト誌10月号が、“The Sun also Rises”と銘打った日本の復活特集を組んだばかりということもあり、出席者の共感を得て、SIMOTの国際浸透を加速することになりました。



## ■ 学生の日 ■

### 国家のSIMOTの重要性

SIMOT RA 博士課程4年 加治木紳哉



SIMOTの授業を受講するようになってから、企業活動の結果だけでなく、その背後にあるイノベーションとインスティテューションの関係にまで注目するようになりました。

その中で、様々な問題が表面化している企業の多くは、社会情勢の変化への場当たり的な対応を繰り返し、企業固有の風土や文化が軽視されているという印象を受けます。これに対し、成果を上げている企業は、時代を

見抜く経営的な観点と、企業のインスティテューションという2つの歯車がうまく噛み合っているのではないのでしょうか。

私の研究テーマは「政府主導の研究開発(輸送技術)」ですが、これらの中にも、問題が表面化している企業と類似する例が見受けられます。端的に言えば、社会情勢の変化と研究開発の主体となる組織の性格の不一致です。国が主導する研究開発は、民間企業の活動にも多大なる影響を与えます。この点を考慮すると、国家のSIMOTも重要性を帯びて来るのではないのでしょうか。



## コラム

### 「新しい制度派経済学」

SIMOT 研究センター センター員/ 運営委員

東京工業大学大学院社会理工学研究科 助教授 蜂谷豊彦



1980年代末から1990年代初めにかけて、世界的な碩学であるケネス・アロー、ダグラス・ノース、オリバー・ウィリアムソン等が「経済的なパフォーマンスを理解するには制度（インスティテューション）\*の働きを理解することが必要である」と指摘して以来、経済学においては「制度が重要である」という認識が急速に浸透している。

これまでの研究では、制度自体の機能、制度が経済的パフォーマンスに与える影響、制度が適切な状況の特定などに焦点が当てられてきた。その結果、1) 純粋な経済モデルには限界があること、2) 制度が資源配分や経済的パフォーマンスに決定的な影響を与えていること、3) 制度には多様性が存在することなどが、現在では共通認識になっている。そして、これらの研究の成果は、発展途上国や計画経済から市場経済に移行した国々が、どのような制度を選択すべきか、どのような制度が望ましいかという課題に適用されている。また、このような緊急の課題があったからこそ、制度に対する関心が高まったということもできるだろう。

この新しい経済学は現在進行形で発展を遂げており、制度のダイナミックな変化と経済的パフォーマンスとの関係、制度が経済的パフォーマンスに影響を与える波及経路、制度とイノベーションとの関係などの研究が精力的に進められている。（\*SIMOTにおけるインスティテューションは、“広義の”「制度」として捕捉される。）



### Co-Evolution 事始

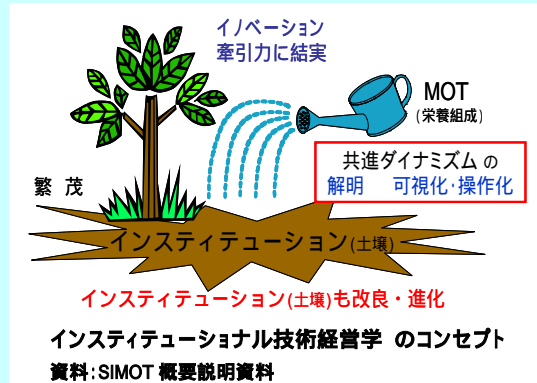
私達は、SIMOTのコンセプトを説明するに当たり、「技術」という『種子』を「インスティテューション」という『土壌』に撒き、「MOT」という『肥料』を適切に与えると、技術はすくすくと育ち、「イノベーション」という『樹木』に繁茂し、それは、根を張り、葉を落とし、地味を豊かにし、土壌が肥沃なものになって樹木をますます繁茂させる、という絵を使いました。圓川サブリーダーが1日考え、Mrs.圓川の「これなら私にもわかる」という一言に自信を得て、文部科学省のヒアリングに臨みました。

私達は、この『樹木』と『土壌』が共に繁茂・肥沃化し合うという「共進化」の仕掛けにこだわりました。そして、経営工学の50余年の研究を通じ、この「イノベーションを育む土壌」たる「インスティテューション」が日本型イノベーションに決定的な役割を果たしてきていることを身体で知り、それは、国家戦略・社会制度、企業レベルでの組織文化、時代背景といった3つの次元で象られると体感してきました。

ところが、この「インスティテューション」を私達が体感した通りうまく表わす日本語が見当たりません。青木昌彦先生の不朽の名著“Towards a Comparative Institutional Analysis”も邦訳されたとたん「比較『制度』分析に向けて」と、私達の体感とははるか離れた言葉になってしまいました。一時「社会経済体質」という言葉で表現しようとしたのですが、私達のこだわりはそれでも満足できず、結局、先の3軸の説明と一緒に「インスティテューショナル技術経営学」と、原語のまま提案することにしました。

SIMOTが数奇な運命をたどることになった源流はここにあります。「正鵠をついた絶妙なコンセプト表現」という意見と、「何のこともさっぱりわからない」という意見が真っ二つに割れたのが旗揚げ当初の姿でした。それから1年余を経てそのバランスはどちらにシフトしたでしょうか。

センター長 渡辺千仞





## SIMOT とは・・・

SIMOT とは、「インスティテューショナル技術経営学 (The Science of Institutional Management of Technology)」の略称です。日本の技術経営が本来機能を回復し、世界価値を創造するダイナミズムについての理論および方法論の探究を目指します。"サイモット"と呼称しています。

## ■ 最近の動き ■

### 海外出張

佐伯 1月3日～ 8日

インド(デリー大学、インド工科大学)

渡辺 1月28日～2月2日

オーストリア(ウィーン 国際応用システム分析研究所)

## ■ イベント予定 ■

### 第2回年次国際シンポジウム

日時 2月27日(月)、28日(火)

場所 東京工業大学 大岡山キャンパス 西9号館 デジタル多目的ホール

テーマ イノベーションとインスティテューションとの共進化ダイナミズムの解明

#### 基調講演者

ネイサン・ローゼンバーグ教授 : スタンフォード大学名誉教授 (技術経済史の権威)

ルイス・M・ブランスコム教授 : ハーバード大学名誉教授 (「ダーウインの海」の概念の提唱者)

藤井照穂氏 : マイクロソフト プロダクト デベロップメント リミテッド : プレジデント

ジェームズ・C・アベグレン氏 : グロービス経営大学院大学名誉教授 兼教授、元上智大学教授  
(「日本型経営」の先駆的研究者、「終身雇用」を初めて使用)

下村満子氏 : 経済同友会 副代表幹事、元「朝日ジャーナル」編集長、  
「朝日新聞」編集委員

シンポジウムに関するお問合せは、下記発行元連絡先までお願いします

### 研究・技術計画学会 国際問題分科会 2月例会

日時 1月25日(水) 18:00～20:00

場所 東京工業大学 百年記念館 第1会議室

テーマ 日本の義務教育と創造性

- 「インスティテューショナル技術経営学」への示唆

講師 折原 守 氏 (放送大学学園事務局長, 前 国立教育政策研究所教育課程研究センター長)

### ● ● 発行 ● ●



東京工業大学 21世紀 COE プログラム

「インスティテューショナル技術経営学」SIMOT 事務局

〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1 W9-51

東京工業大学大学院社会理工学研究科経営工学専攻内

西9号館 208B号室

TEL: 03-5734-2936 FAX: 03-5734-2250

Email: [nakane@me.titech.ac.jp](mailto:nakane@me.titech.ac.jp)

URL: <http://www.me.titech.ac.jp/coe/index.html>

編集者: 菊池 隆